福井大学学術交流協定校への派遣留学（交換留学）　月例報告書（9 月分）

留学先大学：ルーマニア・アメリカ大学
氏名：白越　明

＜はじめに＞

もう気が付けば、季節も秋。9 月の後半にはもう上着がないと肌寒い季節になってきて、木々も色づき始め、秋が来たことを感じさせます。そして、ルーマニアでの留学生活もあと 4 ヶ月と残り少なくなってきました。時間が経つのは本当に早いなあとしみじみと思いながら、この 9 月のことを振り返ってみたいと思います。

＜アイスランドでのボランティア＞

首都レイキャベクの街並み

まず、9 月の前半の 2 週間ほどはアイスランドに行って、ボランティアに参加していました。長期休みだからこそできる、なにか特別なことをしたいと思ったことがきっかけでした。ボランティアの内容は、家畜の世話、荒れている畑の手入れなどがメインでした。また、期間中は首都レイキャベクから少し離れたところにポツンとある小さな一軒家で、他の様々な国から来たメンバーと共同生活を行っていました。他のメンバーは、日本人があと 2 人、ドイツ人 3 人、フランス人 1 人、ロシア人 1 人、そしてリーダーがコスタリカ人でした。その他にも、他のボランティアに参加していたグループの人たち（イタリア、スペイン、ポーランド、オランダ、台湾、韓国、メキシコ、ウクライナ人など）とも触れ合う機会があったりして、今までで一番いろんな国籍の人たちと交流したと自信を持って言えます。食事を作るのも、掃除や仕事の役割分担もすべて自分たちで行わなければならないので、ただ話をしたり、遊びに行ったりするよりもはるかにみんなのことを知ることが出来たと思います。違う国籍の人たちがキッチンに立てば、パスタを作るにしてもみんなそれぞれの料理手順や味付けがあるのでかなり衝突していました（笑）

交代で料理を作るので、いろんな国の料理が食べられたり、反対に日本食でカレーライスや

おにぎりを作ってみんなに食べてもらったりと、料理一つにしてもとても新鮮な経験が送れました。

同じグループのメンバーとは、ずっと一緒に暮らして、休日も一緒に出掛けたりして、同じ時間を共有していました。正直、今までこんなに長く、いろんな国の人たちと同じ空間で生活したことがなかったのですが、気づけば小さな家がとても居心地がいい空間に変わっていて、メンバーともただのボランティアメンバーではない親しい仲になっていました。実は、ボランティアの最終日が私の誕生日だったのですが、サプライズでケーキとプレゼントにメッセージカードまで用意してくれていて、お祝いしてくれました！！！こんな風に他の国の人たちと仲良くなれたということは、今後の私に自信を与えてくれる経験にもなりました。

また、今回強く感じたことは、共通語としての、コミュニケーションのツールとしての“英語”でした。今回ボランティアに参加していたメンバーは、私を含めみんな英語を母国語としない国の出身の人たちで、それぞれ同じ母国語を使う人たち同士では英語以外の言葉を使います。なので、そこら中に様々な言語があふれていました。しかし、それ以外の人たちとコミュニケーションをとるのに使われる言語は、英語でした。英語がないと、自分の母国語を話せる人以外とは話せないのです。しかし逆に、英語を話せるだけでこんなにも地球上で話をできる人が増えるし、それと同時に世界が広がるのです。それを改めて、強く実感させてくれる経験がアイスランドでできました。勇気をもって、ルーマニアから大きく飛び出してみてよかったです。

＜母とルーマニア＞

９月の終わりの１週間には、母がルーマニアを訪れてくれ、一緒にブカレストや他のルーマニアの街を観光しました。正直、今まで９ヶ月もルーマニアにいてほとんど有名な観光地に行ったことがなかったので、この１週間で今までの９ヶ月分よりも観光しました（笑）

ブラショフの街並み

ブカレスト市内では、共産主義時代に建てられ世界で２番目に大きい建築物である国民の館や、ルーマニアの昔の家屋や人々の暮らしを見ることができる農村博物館、旧市街周辺にある教会などを訪れました。また、初めて電車に乗ってブラショフとシナイアという街にも行きました。ブラショフもブカレストとは全く違った街並みで、どちらかというと８月に訪れたクルージュに似ているような気がしました。ブラショフからバスに乗って、ドラキュラ城のモデルにもなったと言われているブラン城にも行きました。これらの街はブカレストに比べるとかなり田舎のほうで、公共交通機関もとても良いとは言えませんでした。しかし、ルーマニアの人々の暮らしがより分かった気がしました。

ブラン城

母と一緒にルーマニアを旅してみて他にも分かったことがあります。それは、自分が自分で思っていたよりもルーマニアでの暮らしに順応できていたということです。屋台で買い物をしたり、他の街に行ったときなど英語が通じない場面が多々あったのですが、そういうときには「これいくら？」とか「ブラショフ行き？」などの簡単な会話をルーマニア語でしていました。自分一人だとなかなか勇気が出なくて、ルーマニア語を話す機会をなるべく避けていたので、自分がこんなに話せるとは気が付いていませんでした。また、ブカレスト内ではバス、地下鉄、トラムなどのあらゆる公共交通機関を使って母をいろんな場所に連れて行ったのですが、それはこっちに来たば

シナイアにあるペレシュ城

かりのころにはあり得ないことでした。ずっといつまでたっても自分がルーマニアに馴染んでいない感じがしていたけれど、客観的に観ると案外ちゃんとここでの暮らしに適応できているのかなと少し嬉しくなりました。1 人暮らしを始めてからさらに、自分の行動範囲も広くなったし、精神的にも強くなったのではないかと思います。

＜最後に＞

日本では、同級生がインターンシップや就職説明会などに参加していて内心すごく焦っていたけれど、私は私にしかできない夏休みを過ごせたのではないか思います。他の誰とも違う時間を過ごせたし、この経験を就活で活かしたいです。夏休みが終わって心機一転、次のセメスターも頑張っていきます。